

## 源右衛門（げんえもん）窯の歴史と理念

源右衛門窯は 260 年以上前に築かれ、1753 年以来、機械化をほとんど行うことなく手作業による伝統を守り続けてきた。極めて洗練された伝統的な工程を今も残している窯元のひとつであり、有田の磁器を世界中に轟かせる役目を果たした。江戸（えど）時代（1603～1867）は共同窯で焼成を行っていたが、1867 年の倒幕により窯に関する厳しい規制が緩和され、1870 年代初めに西洋のデザインを基にした新しい窯が現在の場所に改めて築かれた。

主に伝統的な日本食レストラン向けのテーブルウェアの生産に取りかかった。六代源右衛門（1928～1989）は、五代源右衛門（1962 年没）の 1951 年の退職後に跡を継ぎ、有田焼をベースとした模様入りの織物や万年筆といった家庭用アイテムを生産した。現当主で、六代源右衛門の次男・金子昌司（かねこしょうじ）（1957 年生まれ）さんも、ティーカップや箸置きなど日常使いの手作り作品の生産に引き続き注力している。

職人は生産工程の 1 つにのみ特化するという伝統を守り続けているため、源右衛門で作られる磁器の各工程（成形、下絵付け、施釉、上絵付け、焼成）はそれぞれ別のチームが行っている。工房では、仕事を観察して指導を受けられるよう、新人の職人がベテラン職人の隣に座る形をとっている。